

## 令和2年度 学校経営計画及び学校評価

## 1 めざす学校像

しっかりと生徒と向き合い、信頼に基づいた教育活動を展開することで、生徒の「意欲」を育て「力」をつける学校をめざす。

- 互いに信頼で結ばれた関係を作り上げ、その中で豊かな人間性が育成される学校をめざす。
- 学力はもとより人間関係形成能力等も含めた総合的な「人間力」をつけることのできる学校をめざす。
- 専門コース設置校の特色を生かして生徒の学習意欲を引き出し、多様な進路をサポートできる教育活動を継続していく。

## 2 中期的目標

## 1 進路実現をはかる学力の育成

(1) 「わかる授業」をめざし、創意工夫の授業改革に取り組む。

- ICT 機器・視聴覚機材を取り入れ、教材や指導法の工夫を図り、「わかる授業」「魅力ある授業」を創出する。
- 相互の授業見学や研究授業、授業改善の研修を通じて積極的に授業改善を図る。

※学校教育自己診断「授業はわかりやすい」の項目の肯定率を60%とし、R4年度には67%以上にする。(H29年度61% H30年度56% R1年度64%)

(2) 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成をはかる。

ア. 学力生活実態調査を年2回実施し、学力の定着度を測定するとともに、学力向上プラン策定の資料とする。

イ. 生徒が進路へ積極的に取り組むモチベーションを高める取組みをおこなう。

※平成29年度から導入した学力生活実態調査のA・Bゾーンの生徒数を、R4年度まで20人以上維持。

※進路先に対する満足度アンケートをおこない、毎年肯定的回答90%以上を維持する。

※中堅私大の合格者をR2年度は10人、R4年度までに20人以上にし維持する。(H29年度13人 H30年度11人 R1年度2人)

(3) 多様な進路ニーズに応えるため専門コースや総合系の授業を充実させる。

ア. 高大連携により大学での学びの先行実施を行い、人文ステップアップコースの進学に対する生徒のモチベーションアップを図る。

イ. 専門コース(社会文化コミュニケーションコースや美術工芸表現コース)の特色を生かした取組みを行う。

## 2 豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成

(1) 社会に通用するコミュニケーション力のある人材を育成する。

ア. 教育相談体制の再構築とカウンセリングの手法を用いた対話主体の生徒支援をおこなう。

イ. 開発的カウンセリングの視点をもって生徒の自己肯定感の育成をすすめる。

ウ. ユニバーサルデザインの授業等でのプレゼンテーション活動を通して生徒の自己発信力をたかめる。

※学校教育自己診断のアンケート(教員)「教育相談体制が整備」の肯定率をR4年度までに70%以上をめざす。(H29年度65% H30年度68% R1年度59%)

(2) 規範意識と環境意識を育成する。

ア. よりよく社会で生きるために必要な力の育成として、教員全体が協力して一人ひとりを大切に丁寧な生徒指導をめざす。

イ. 学校が安心できる居場所づくりとなるようにSNS等の適切な使い方を教えるとともに複数回の面談を通して学校生活への定着をすすめる。

※生徒向け学校教育自己診断の「学校へ行くのが楽しい」の項目の肯定率をR2年度78%にし、R4年度には85%以上をめざす。(H29年度72% H30年度67% R1年度77%)

※学校教育自己診断(生徒)「悩みや相談に親身にに応じてくれる」をR4年度までに75%以上(H29年度62% H30年度63% R1年度67%)

※担任、進路指導担当による生徒面談複数回実施(100%)

(3) 部活動の活性化を図る。

ア. 継続的な入部促進と退部率の抑制により、帰属意識を高める。

イ. 地域との交流を通して自己有用感の向上を促す。

※部活動の加入率をR4年度まで60%を維持し、退部率前年度比5%削減をめざす。(加入率H29年度64% H30年度67% R1年度57%)

(4) ユネスコスクールの活動を基盤に、社会参画意識の育成を図る。

ア. 社会貢献活動をととして自尊感情・自己有用感の向上を図る。

イ. 地元小中学校や地域社会と連携し、地域活動や異校種との交流を通じて社会に貢献する活動を推進する。

※小学校、中学校や地域の行事、学習活動等に参加する機会の設定(年間2回)

(5) 共生推進教室の取組みを生かし、生徒のコミュニケーション能力等の育成を図る。

ア. 「ともに学びともに育つ」の理念のもと、共生推進教室の生徒が他の生徒や地域の人々と交流する機会をより多く設定する。

※R4年度まで、共生推進の生徒の進路決定率100%を維持する。

## 3 専門コース制の確立とともに、学校行事や校内組織の改革を行う。

ア. 全教職員がいずれかの専門コースに所属し、後継者を育成することでコースの継続性を確保する。

イ. 各専門コースの進路選択状況や成果と課題を毎年検証し、必要に応じて課程や内容を修正する。

ウ. 日程変更した体育祭、文化祭の定着を図るとともに、内容の充実と効率化の両立を追求する。

エ. 教職員数減に応じて、効率的な学校運営をめざし、分掌の再構成や大職員室化等を検討する。

## 【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

| 学校教育自己診断の結果と分析 [令和 2年 12月実施分]   | 学校運営協議会からの意見  |
|---|---|
| <p>全体に生徒の肯定的回答が微増。授業に関しては「教え方に工夫をしている先生が多い。75%(+12p)「授業で分からないことについて先生に質問しやすい。」70%(+10p)。個々の生徒に対しては「先生は生徒のプライバシーなどを守ってくれる。」81%(+12p)、「学校に行くのが楽しい」78%(+1p)「悩みや相談に親身になって応じてくれる先生が多い。」70%(+7p)など、信頼を寄せてくれる一方で「担任以外に保健室や相談室等で相談できる先生がいる。」については59%(+2p)にとどまっており、学校体制としての周知が不足した結果となった。</p> <p>保護者の肯定的回答は微減(-2p)。「いじめのない学校づくりに取り組んでいる。」86%維持。「学校の学習指導の方針に共感できる。」81%(+10p)など全体として肯定的評価であったものの感染防止の対応により「保護者の授業参観の機会がある。」67%(-21p)「学校の行事に参加したことがある。」52%(-20p)等で大きく数値を下げた。今後はレッドステージでも可能な保護者の活動形態を模索したい。なお、アンケートは紙ベースからフォーム作成ツールに変更した結果、保護者の回答率が71.1%(+41.2p)となったので、今後もこの方法で実施予定。</p> | <p>【第1回 8月21日(金)】今年度学校経営推進事業に「開発的カウンセリングを中心にした生徒の自己肯定感を高める取組み」として応募し支援校として認められた。それを受け、教育相談体制の整備とカウンセリングの視点をもって自己肯定感を育成するために実施しているアサーショントレーニングなど、生徒が理解しやすくなる工夫を続けていただきたい。また、部活動では加入率の向上や退部率の抑制をお願いしたい。・オンライン授業ではWeb会議システム以外の活用も今後、継続いただきたい。</p> <p>【第2回 10月30日(金)】授業見学におけるねらいと各分掌の進捗状況について意見交換。<br/>・国語の授業でコマなども活用して日本文化にふれさせているは大切。<br/>・数学はミナズ(共生推進教室)生徒の抽出授業。ミナズ生徒の定期考査、その評価の方法と保護者との共有をお願いする。<br/>・社会の3年生の授業では選挙等での社会の権利を学んでおり、そのテーマを理解させてほしい。</p> <p>【第3回3月1日(月)～15日(月)】感染拡大防止のため書面開催。ミナズ生徒の定期考査及び評価について各委員に説明し了解を得る。委員からは長期的展望を踏まえた目標設定が苦手な高校生へのサポートの継続の要望があった。また、本校の「進路別満足度」及び「悩みに親身になって応じてくれる先生が多い」の肯定的割合の高さや、地域や小中学校との連携も生徒の自己肯定感の向上につながっているなどについても高い評価をいただいた。次年度の目標についても承認された。</p> |

## 3 本年度の取組内容及び自己評価

| 中期的目標           | 今年度の重点目標   | 具体的な取組計画・内容   | 評価指標  | 自己評価   |
|-----------------|--|---|---|--|
| 1 進路実現をはかる学力の育成 | <p>(1)「わかる授業」をめざし創意工夫の授業改革に取り組む</p> <p>ア「学びを自信に」つなげる授業改革</p> <p>イ 校種を超えた授業公開・研究授業</p> <p>(2) 「確かな学力」の定着から進路実現できる学力の育成を図る</p> <p>ア 学力生活実態調査の導入実施</p> <p>イ 生徒が進路実現へ積極的に取り組むモチベーションを高める取組み</p> <p>(3)多様な進路ニーズに応えるため専門コースや総合系の授業を充実させる</p> <p>ア 高大連携の活用で相互意識の向上</p> <p>イ 専門コースの内容のランクアップ</p> | <p>(1)</p> <p>ア・コース授業改善委員会を核に新学習指導要領の主旨を踏まえ、「わかる」から「自ら考える」ことで「学びを自信に」つなげる授業改善に向けた研修。</p> <p>イ・小中学校の公開授業や研究授業を複数教科で開催。</p> <p>(2)</p> <p>ア・学力生活実態調査（4月と10月実施）をツールにして学力定着度を測定・分析。進路目標実現に向けキャリアパスポート等で具体的な支援を実施。</p> <p>イ・進学講習の参加者への家庭学習の定着を支援。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・長期休業中には「勉強マラソン」を行い、主体的学びへつながる自学自習の習慣を習得させる。</li> <li>・1年次進学準備クラス、2年次以降人文ステップアップコースにより進学希望の生徒のモチベーションアップを図る。</li> <li>・朝学習を週2回全学年で実施し、朝読書もとりいれ読書活動の活性化を図る。</li> </ul> <p>(3)</p> <p>ア 大阪成蹊大学、龍谷大学との高大連携等を活用した高大接続に繋がる大学等での学びの先行実施。</p> <p>イ 社会文化コミュニケーションコースでのフィールドワークの実施。異校種や地域の連携先と交流活動、防災教育等の実施。</p> <p>美術工芸表現コース国公立、嵯峨美術大学、大阪芸術大学、京都芸術大学等中堅美大の合格にむけ、制作スキルの向上と展示運営のスキルの習得。</p> | <p>(1)</p> <p>ア・学校教育自己診断生徒「授業はわかりやすい」肯定率60%(R1年度56%)</p> <p>イ・異校種連携の他校からの研究授業への参加する機会の設定。研究協議1回。</p> <p>(2)</p> <p>ア・学力生活実態調査の上位者(A、B1ゾーン)20人維持(R1年度21人)、進路別満足度各肯定率90%維持(R1年度各88～100%)</p> <p>イ・受講者へ学校教育自己診断アンケートを実施し「家庭学習が習慣となった」60%以上。(今年度より)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「勉強マラソン」参加者へ同アンケートを実施し「勉強方法が身についた」60%以上。(今年度より)</li> <li>・中堅私大の推薦・AO合格者20人(R1年度2人)、看護医療系合格者を10人以上(R1年度10人)。</li> <li>・昼休み図書館開館の定着。毎月の利用者数10%増。(利用者名簿から)(今年度より)</li> </ul> <p>(3)</p> <p>ア・参加生徒へのアンケートで満足度60%以上。(今年度より)</p> <p>イ 美術工芸表現コースは生徒アンケートにより生徒の満足度や来場者からの作品や展示方法に関する肯定的回答70%をめざす。社会文化コミュニケーションコースのフィールドワークの参加者10%増。参加生徒対象アンケートの参加満足度60%以上。(今年度より)</p> | <p>(1)</p> <p>ア・学校教育自己診断生徒「授業はわかりやすい」肯定率69%(+5p)、「教え方に工夫をしている先生が多い」75%(+12p)「授業で分からないところを質問しやすい」70%(+10p)「視聴覚機器やPCを使う機会がよくある。」80%(+5p)等、今後ともICTを活用した授業改善を進めていきたい。(◎)</p> <p>イ・地元五中学校の進路担当者との情報交換・意見交流は1回実施。研究授業は感染予防により外部公開できなかったため評価なし。ただ、複数の中学校に対してWeb会議システムを活用しての出前進路学活、体験授業は実施できた。今後も情報発信の点で継続的な活用予定。(一)</p> <p>(2)</p> <p>ア・進路別満足度アンケートでの肯定的回答が94%。(◎)</p> <p>学力生活実態調査のA・Bゾーンの生徒数は16人と減少。(△)</p> <p>イ・今年度からの設定項目「家庭学習が習慣となった」46%。学習支援クラウドサービスを活用したオンライン学習等での反転授業等を見据えて本校生の実態把握をするために項目を設置。次年度以降、休校時だけでなく、授業やHR時において双方向のやり取りの際、スマートICを活用した方法の導入を加速させる。(△)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「勉強方法が身についた」については、自主的に自学自習できる生徒を育成するための今年度初めて設置した項目であるが、今年度は「勉強マラソン」自体、長時間生徒同士が接触する取り組みで感染防止対策として実施は中止したため評価なし。(一)</li> <li>代替として1時間単位の進学講習を放課後設定。1年生は進学準備クラス以外に33人。2年生は進学講習以外の学習支援講習【寺子屋】に3クラス近くの生徒が参加。3年生は推薦入試で合格後も講習に参加するなど最後までチャレンジする生徒が増加。</li> <li>・中堅私大の合格者は1人ととどまり未達だが看護医療系は17人の合格で増加。ただし、コロナ禍により進路の志向が変化したため評価なし。(一)</li> <li>・図書館の利用については、2年生で朝学習を実施したが、昼休みの図書館の開館については、感染予防のため不定期となったため評価なし。(一)</li> </ul> <p>(3)</p> <p>ア・大阪成蹊大学、龍谷大学との高大連携事業については、感染予防のため大阪成蹊大学と1回実施。参加満足度アンケートの肯定的意見は90.8%で達成。(◎)</p> <p>イ・美術工芸表現コースにおける進学実績は、嵯峨美術大学、大阪芸術大学、近畿大学等の芸術コースに13人合格した。さらに作品の展覧会への企画運営については、卒業展をはじめ外部の展覧会が中止となったため、芸文祭および校内展示会とした。レッドステージでも鑑賞可能な手段としてオンライン展示会の準備を進めているところである。校内の展示会を実施した満足度については、「満足、どちらかと言えば満足」の肯定的回答が3年71%、2年95%となった。</p> <p>制作スキルについては、芸文祭において、美術工芸表現コースや美術部の生徒、優秀賞3作品、奨励賞4作品、入選は21作品と多くの作品が美術工芸部門で優秀な成績を収めた。</p> <p>社会文化コミュニケーションコースにおけるフィールドワークは、感染予防のため外部機関との交流の代わりに、地域での清掃活動などを2回設定し、講座の生徒が予定通り参加できた。さらに、OSAKAスマホサミット2020でコースの生徒7人が交流に参加し、優秀賞を学校として受賞。3人が個人の優秀賞を受賞した。参加満足度アンケートの肯定的意見は92.1%で達成。(◎)</p> |

## 府立北摂つばさ高等学校

|                             |   |   |  |  |
|-----------------------------|---|---|--|--|
| <p>2 豊かな人間性と社会で生き抜く力の育成</p> | <p>(1) 社会に通用するコミュニケーション力のある人材の育成<br/>ア 教育相談体制の再構築<br/>イ コミュニケーション力育成<br/>ウ 自己発信力向上</p> <p>(2) 規範意識と環境意識の育成<br/>ア 生徒指導の充実<br/>イ ガイダンス・クラス開きの充実による安心できる居場所づくり</p> <p>(3) 部活動の活性化<br/>ア 部活動を通して自己有用感の向上</p> <p>(4) 社会への参画意識の育成</p> <p>(5) 共生推進教室の取組み</p> | <p>(1)<br/>ア 教育相談体制の再構築とカウンセリング的な手法を用いた、対話を中心とした生徒対応ができるように教職員の意識と行動の変容を促す。<br/>イ 開発的カウンセリングの視点からの生徒の自己肯定感を育成するために SC, SSW および地域と連携した諸活動を通して双方向のコミュニケーション力の育成を図る。<br/>ウ エンパワメント・サティン授業等で生徒がプレゼンテーション等の体験活動を通して自己発信力の向上をめざす。</p> <p>(2)<br/>ア 遅刻多数の生徒に対し、5回ごとに改善指導を行い生活習慣の確立を促し遅刻者数の減少をめざす。<br/>イ 安心して学校生活を送るため SNS 等の適切な使い方を学び良好な人間関係を構築できるようにするとともに、きめ細かな面談の実施(2回以上/年間)。</p> <p>(3)<br/>ア 継続的な生徒の入部促進と多様な場面での活動を促す。帰属意識を高め自己有用感の向上を図る。</p> <p>(4)<br/>ア 地元小中学校や地域社会と連携し、社会に貢献する活動を推進する。</p> <p>(5)<br/>ア 共生推進生徒と普通科の生徒との協働活動の場面を行事などにおいて設定する。<br/>イ とりかい高等支援学校と連携して実習先、進路先を確保。就労への丁寧な意識づけと支援をおこなう。</p> | <p>(1)<br/>ア 学校教育自己診断のアンケート(教員)「教育相談体制が整備」の肯定率 70%以上。<br/>イ 学校教育自己診断のアンケート(生徒)「学校に行くのが楽しい」の項目 78%以上。<br/>ウ 同アンケート(生徒)「授業を通して自信がついた」の項目 70%以上。(今年度より)</p> <p>(2)<br/>ア 遅刻数を前年度比 5%減(2950)以下にする。(R1 年度 3104、H30 年度 2420)</p> <p>イ 学校教育自己診断(生徒)「悩みや相談に親身にに応じてくれる」70%以上(R1 年度 67%)。<br/>担任及び進路指導担当による生徒面談(複数回)実施 100%(今年度より)</p> <p>(3)<br/>ア 1 年生入部率 60%以上で退部率前年度比 5%減としアンケート等でクラブ活動満足度 70%(今年度より)</p> <p>(4)<br/>ア 小中学校及び地域自治体との連携の機会を設定。(年 1 回)</p> <p>(5)<br/>ア 共生推進教室設置校対象のアンケート等で第 3 学年の生徒の協働活動参加満足度 70%。<br/>イ 十分な実習先の確保と 3 年生全員の進路実現 100%。</p> | <p>(1)<br/>ア・令和 2 年度教育庁の学校経営推進費の支援校 12 校に選ばれ、開発的カウンセリングを中心とした生徒の自己肯定感の向上をめざした取り組み「心を鍛えるつばさチャレンジ」を実施。教育相談と支援教育を統合させた相談支援委員会を発足。箱庭やブリーフセラピー、リフレーミングなどのカウンセリングの手法を活用するための研修を実施。課題を持つ生徒に対し個別の教育支援計画を策定し、生徒指導に生かすなど支援体制を再構築できた。この事業により「教育相談体制が整備」(教職員) 78%(+20p)と大きく前進できた。体制構築のほか事業費で外部講師による研修の実施、箱庭設置、タブレット購入等が可能となり初年度の「心を鍛えるつばさチャレンジ」としては目標達成。(◎)</p> <p>イ・自己肯定感を育成する手段の一つとして SC, SSW との面談も有効に活用できた。相談支援委員会では、SC, SSW といった心理面と福祉面での専門家に指導助言いただくことで、生徒や保護者に対するセーフティネットがひろがった。「学校に行くのが楽しい。」生徒保護者共に 78%維持で目標達成 (○)</p> <p>ウ・生徒の自己発信力を高めるためにプレゼンテーション力の向上を図る。タブレット等の活用で自分の意見を発信する能力をつけさせるために、今年度から設置した項目。「授業を通して自信がついた。」57%で未達。(△)</p> <p>(2)<br/>ア・休校明けから新入生に対し、生活規律の徹底を図ったが、生徒の現状から判断した結果、遅刻の減少よりも生徒の安心できる居場所として学校を位置づけ、遅れてもいいので登校するようにという指導に切り替えた。その結果、12 月段階で遅刻者数は昨年 3104 人から 3397 人と 293 人増加したが、欠席者は 3470 人から 2967 人と 503 人減少できた。遅刻者数としては未達であるが、生徒の居場所の位置づけの成果としては目標達成 (○)。</p> <p>イ・生徒対象に SNS の使い方の講習会やインターネットへの依存度をアンケートで実施。現状分析により生徒の実態にあった指導を入れ適切な使用についての啓発活動に努めた。担任及び進路指導担当における生徒面談は複数回実施済。生徒からの小さな SOS に対応できるようアンケートをしっかりと張って連携体制がとれるようにしている。「悩みや相談に親身にに応じてくれる」70%(+3p)「困っていることに真剣に先生は対応してくれる」76%(+5p)「先生はプライバシーや知られたくない秘密を守ってくれる」81%(+12p) (◎)</p> <p>(3)<br/>ア・1 年生の部活動の入部率は 52.4%で 60%には届いていないが、今年度は帰属意識を高める居場所として部活動を位置付け退部率(5%減)に焦点を当てた。年度内の 1 年生の退部率は 1.4%、2 年生は 2.9%と目標達成。クラブ活動の参加満足度アンケートの肯定的意見は 81% (○)</p> <p>(4)<br/>ア・感染予防のため Web 会議システムによる出前進路学活や体験授業等 3 回実施できた。(○)</p> <p>(5)<br/>ア・体育祭、文化祭でクラス内での協働ができた。第 3 学年対象の満足度のアンケートは未実施のため評価せず。(ー)</p> <p>イ・共生推進教室の生徒の適性に合わせた実習先が確保できた。3 年生 3 名とも進路決定。(○)</p> |
| <p>3 学校行事や校内組織の改革</p>       | <p>ア 効率的なコース運営<br/>イ コースの検証<br/>ウ 日程変更した行事の定着<br/>エ 効率的な学校運営</p>  | <p>ア 全教職員が各コースに所属し、後継者を育成することでコースの改善とともに継続と定着を図る。<br/>イ コース 1 期生の進路選択状況や成果と課題について検証軸を定め、必要に応じて修正検討を始める。<br/>ウ 日程変更による体育祭と文化祭の実施について成果と課題を検討し、準備日程の定着をめざす。<br/>エ 「府立学校における働き方改革に係る取組みについて」に沿って分掌再編を行い業務の見直し、効率化を図る。</p>  | <p>ア コース授業改善委員会の検証のもと、ネット学習チームによる学習教材の集約を行いネット教材 30 以上確保。(今年度より)<br/>イ 確実な成果と課題の引継ぎを明文化。<br/>ウ 学校教育自己診断教職員の学校行事の工夫改善項目の肯定率 75%(H30 年度 72% R1 年度 73%)<br/>エ 同 分掌再編、連携、職場環境に関する項目の肯定率 40%にする。(H30 年度 35% R1 年度 37%)</p>  | <p>ア・コース授業改善委員会、WiFi お助けチームの協力のもと、本校に着任 2 年め以降の全教員が専門コースに所属し、専門コースの継続性を図るとともに後継者を育成する体制を整えた。日常的に学習クラブサービスの活用で整備教材 30 確保。今後は新分掌企画部で業務を担当。(○)</p> <p>イ・人文ステップアップコースでは、希望進路決定につながる進学実績が伸びたものの、中堅私大への合格者率がそれほど上がらなかったため、進路指導部を中心にデータによる分析を次年度に取り入れ進路指導に生かす予定。社会文化コミュニケーションコースは、アクティブラーニング、プレゼンテーション等の学習形態を中心とした地域活動、高大連携に特色があるコースである。今年度は感染拡大防止のため、交流活動に大きく制限がかかり、十分な成果が上げられたとは言えない。しかしながら OSAKA スマートミット 2020 での優秀賞の受賞など外部の企画を活用することで、生徒の活動を一部保障できた。次年度も外部企画の活用を考えていきたい。美術工芸表現コースも、外部展示等が制限されたが、芸文祭や校内展示等で生徒の発表の機会を設けることはできた。オンラインでの展示会も予定しており多様な発表形態を設定できた。次年度への引継ぎとしたい。(○)</p> <p>ウ・休校期間の影響もあり文化祭・体育祭ともに実施日程変更、規模縮小、感染防止対策など多くの制限の中、大きなトラブルもなく実施できた。学校教育自己診断(教職員)「学校行事の工夫改善を行っている。」79%(+6p)(生徒)「文化祭・体育祭が楽しく行えるよう工夫されている。」74%(文化祭+4p・体育祭+5p)(○)</p> <p>エ・業務の偏りの見直し、スクラップできる業務の洗い出しを通して分掌の再編を実施。機能的にかつ柔軟に横のつながりを大切に活動できるよう生徒指導部と生徒会を生徒部として統合。オンライン関係や式典・広報等総務全般を集約する分掌として新しく企画部を立ち上げた。従来の分掌においては「円滑な連携ができていた。」は 29%と低く、「相談し合える職場の人間関係ができていた。」も 52%にとどまった。平均すれば目標の 40%達成であるが、次年度に向け学年・分掌間の連携がさらに機能的に進むようにしたい。大職員室にむけ LAN 等の環境整備も進んだ。(○)</p>   |